甲子園：高校生が輝くステージ

©講談社写真部

阪神甲子園球場

高校野球の全国大会「甲子園」は野球に打ち込む人々の憧れの舞台です。甲子園をめざす高校生が野球を通じて成長する姿は日本中の注目を集め、多くの人々に感動を与えています。日本では、野球以外にもさまざまな分野で高校生のための全国大会が開催されています。

日本の夏の風物詩「甲子園」

毎年8月になると兵庫県西宮市の阪神甲子園球場で「全国高等学校野球選手権大会」が行われます。2009年に91回目を迎えたこの大会は、試合が行われる球場の名前から「甲子園」とよばれています[*1]。出場するのは、全国4000校以上の中から予選を戦い抜いて各都道府県の代表の座を勝ち取った、高校の野球部49校です[*2]。甲子園に出場することは、高校球児はもちろん、野球をする子どもたちにとって大きな憧れであり、目標となっています。

メディアの注目

二週間にわたる大会は連日メディアをにぎわします。新聞は、試合の模様を報じるのはもちろん、活躍した選手をめぐるエピソードで紙面を盛り上げます。週刊誌は日々の試合の名場面を報じ、スポーツ雑誌は甲子園特集を組みます。テレビやラジオでは、開会式に始まり、すべての試合が毎朝9時から夕方4時すぎまで生放送されます。

© TJF

甲子園を包む熱気

8月は一年で最も暑く湿度も高いため、カンカン照りの日差しの下での2時間以上にわたる試合は、時に厳しい戦いになります。そんな中で、球場の応援席も、テレビやラジオの前の人たちも、投手の一投一投を固唾を飲んで見守り、野手のファインプレーに歓声をあげ、試合に熱中します。球場でどよめく数万人の声援に、両校の応援団が打ち鳴らす太鼓と、吹奏楽のリズムが重なり、渦巻く熱気はまるで祭りのようです。

そして夜には、一日の試合をふりかえる特別番組が放送されます。日頃はさほど野球に関心がなくても、夏の甲子園は楽しみにしているという人はめずらしくありません。

*1 甲子園球場では毎年3月に「選抜高等学校野球大会」も行われ、「春の甲子園」と呼ばれている。
*2 47都道府県のうち、北海道と東京は学校数が多いので2校選出される。

© Printland ISONO

県大会優勝をめざして気合を入れる横浜隼人高校の選手たち

人々を魅了する甲子園

甲子園は、このように日本全国の人々を巻き込む社会現象になっています。それはなぜでしょうか。

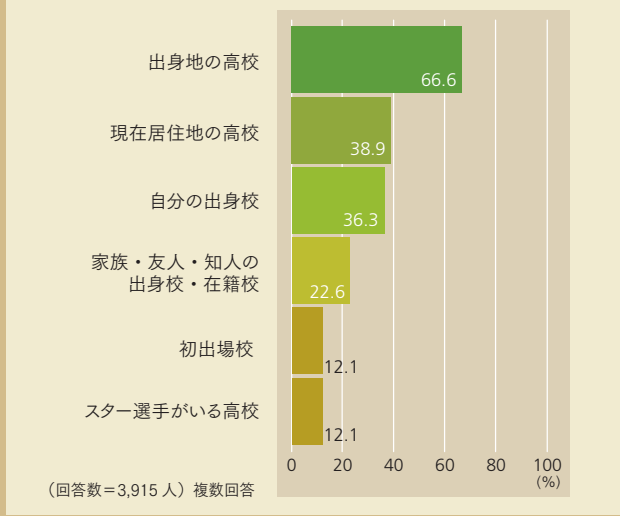
出場校は地域の代表

© TJF

甲子園出場を祝う地元の商店街

全国を巻き込む人気の背景には、この大会が地域に根ざしたものであることが挙げられます。各都道府県では、代表校が決まると地域ぐるみの準備が進められます。学校や地域で壮行会が行われ、野球部は市長や知事を訪問して激励を受けます。学校の校舎や通学路の商店街には「祝・甲子園出場！」という大きなたれ幕がかかげられます。調査によれば（表参照）、甲子園でどの学校を応援するかという質問に、多くの人が出身地や居住地の高校を応援すると答えています。出場校は各都道府県の代表であり、人々は地元の選手たちを身近に感じ、共感を抱いていることがうかがえます。

夏の甲子園大会でどの学校を応援するか、決め手となるものは何ですか？



資料：「高校野球についてのアンケート」TEPORE、2007年
http://www.tepore.com/

全力を尽くす球児たち

高校野球部の練習が、一年を通じてほとんど休日もなく、心身を限界まで追い詰めて鍛えぬく厳しいものだということは広く知られています。優勝という目標に向かってひたむきにボールに向かっていく選手たちの姿と彼らの成長の物語が、観る人々の心を揺さぶります。また、トーナメント制のため、一度敗れると次の試合がないという緊張感も甲子園特有のものです。負けた選手たちは、グラウンドにひざをついて涙ながらに球場の土を袋に詰め、郷里に持ち帰ることが恒例となっています。甲子園では、勝ったチームだけでなく負けたチームの健闘ぶりも人々の心に刻み込まれるのです。

© TJF

試合後、勝利を喜び駆け出す選手

ヒーロー誕生の地

夏の大会が終わると、甲子園で活躍した選手たちの進路が国民的関心を集めます。プロ野球選手には、甲子園で活躍し高校生の頃から全国的に有名だった選手もたくさんいます。なかでも星稜高校出身の松井秀喜選手[*3]や、横浜高校出身の松坂大輔選手[*4]は、後に日本の球団からアメリカのメジャーリーグに移籍して、野球の本場であるアメリカでも広く知られるようになりました。高校生の頃から彼らを知る日本の人々は、野球の勝敗だけでなく、彼らのスポーツマンとしての生き様に注目しているといってもよいでしょう。

*3 2003年～ New York Yankees、2009年～ Los Angeles Angels

*4 2007年～ Boston Red Socks

野球を通じて成長する高校生たち

2009年、日本全国の高校の約8割にあたる4,132校で、17万人近い高校生が野球に打ち込みました。そのひとつ、神奈川県の横浜隼人高等学校はこの夏初めて甲子園に出場し2回戦まで進出しました。しかし、その一年前には誰もこのような快挙を予想しませんでした。

主将の決意

部員108人が、平日は5時間、休日は12時間という厳しい練習を積み重ねる日々。監督からは「(監督から)言われる前に自分たちで気付いて互いに指導しあえ」と言われ続けていましたが、部内には意見をぶつけあうことをためらう雰囲気がありました。主将の杉本政知さんは、部員の自主性を高めるために、まず自分が変わらなくてはと考え、厳しいことも伝えるようにしました。注意されるとただ短く返事をするだけだった部員が、次第に意見を言うようになったのは変化の兆しでした。全員が主将のつもりでがんばろうという気持ちが、チームの中に育ち始めました。

© TJF

横浜隼人高校の応援席。「仲間」と「隼」の文字はクラスメートや家族が祈りを込めて折った小さな折り鶴を糸でつないで作った。

108人の心がひとつに

とはいえ、試合に出るのは選ばれた少数のメンバーだけというのが野球部の厳しい現実です。杉本さんも試合に出られないのが悔しく、自分のことではなくチームのためを考えて自分なりの貢献をしようと思えるまでに時間がかかりました。そんな杉本さんが一番心に残っているのは、甲子園出場校を決める神奈川県大会で優勝した日のことです。出場できなかった選手たちまでが泣いて喜んでいました。108人全員が、チームのために心をひとつにすることができたからこそ勝てたのだと気づいた瞬間でした。

選手を支えた応援

甲子園球場で初めて練習をした杉本さんは、夢の舞台に立ったという実感でノックをする手がふるえたといいます。試合に出られないほかの3年生は、応援団に立候補し、全力を尽くしてチームのサポートにまわりました。試合には、陰ながら毎日の練習を支えてきた家族、そして学校や地元から、バス50台、新幹線で400人もの人々が応援にかけつけ、選手たちの成長ぶりを目に焼きつけました。

国を越えた共感

日本全国の野球部には、それぞれにドラマがあります。甲子園をめざした二つの高校のドラマが描かれたドキュメンタリー “Kokoyakyu:High School Baseball” [*5] は、アメリカのテレビで放映され好評を得ました。現在はDVDが販売されています。野球を通じて日本の高校生たちが成長していく姿は国を越えて多くの人に感動を与えています。

*5 監督 Kenneth Eng, 2006年

甲子園の歴史

もともと、日本の野球の歴史は学生野球から始まりました。1870年代に、日本の学校で教鞭を取っていたアメリカ人が、学生たちに教えたと言われています。1910年代に、朝日新聞社の主催する学校対抗野球の人気が急速に高まる中で、阪神電鉄が日本初の本格的な球場として甲子園を建設しました。経済発展の途上にあった当時の日本で、レジャー産業を開発して多くの人に電車を利用してもらおうと考えたのです。新聞に始まり、後にはラジオやテレビの全国網が発展するにつれ、日本中の人が、報道を通じて学生による野球の試合を楽しむようになりました。

さまざまな甲子園

日本では、野球の他にも高校生を対象とした全国大会が様々な分野で開催されており、活躍する高校生の姿に多くの人が注目しています。高校生の全国大会の代名詞ともいえる「甲子園」の名を冠した大会も数多く、ここに紹介するほかにも、写真甲子園、まんが甲子園、俳句甲子園、ディベート甲子園、ファッション甲子園（Meeting People参照）などが行われています。

写真甲子園：http://town.higashikawa.hokkaido.jp/phototown/koshienofficial.htm
まんが甲子園：http://manga-koshien.net/
俳句甲子園：http://www.haikukoushien.com/
ディベート甲子園：http://nade.jp/koshien/

ものづくり甲子園 *6

日本では全高校生の約8%が工業科で学んでいます。この大会では工業科の生徒たちが技術を競います。全国大会は狭き門で、出場するのは学内選考、都道府県予選、地区予選の3段階を勝ち抜いた選手たちです。高校生にとって技術をみがく機会となるだけでなく、就きたい仕事を考えるきっかけにもなっています。

一見すると個人競技のようにみえるこの大会ですが、選手たちの特訓を支えるのは仲間の存在です。群馬県立藤岡工業高校からは新井康宏さん（全国大会出場）と岩下翔さん（地区予選出場）が電気工事部門に挑戦しました。この高校では、他に5人の生徒が練習に参加し、材料を準備したり、施工速度を上げる方法を一緒に考えたりして協力しました。競技課題を制限時間内に仕上げるには相当な訓練が必要で、7人は夏休みも毎日学校に通って何時間も練習しました。岩下さんは、難しくて練習をやめてしまいたくなったとき、仲間の一人から「やめてもいいけど、この先就職したときも、できなかったら投げ出すような人になるんじゃないの。」と言われてしまいました。親身になって厳しいことを言ってくれる仲間のためにもやり遂げなければと思い、努力を続けることができました。

© TJF
ものづくり甲子園で電気工事の技術を競う生徒たち

*6 ものづくり甲子園：正式名称は高校生ものづくりコンテスト全国大会。
主催：全国工業高等学校長協会　http://www.zenkoukyo.or.jp/

映画甲子園 *7

映画制作に夢中になっている高校生もいます。2009年の第4回映画甲子園には200作品以上の応募がありました。

©沖縄県立開邦高等学校映画研究部
『赤点ヒーロー』のワンシーン

沖縄県立開邦高校映画研究部の作品『赤点ヒーロー』は、学校で毎日隣の席に座るクラスメートとの心のふれあいをコミカルに描きました。部の自慢はチームワークのよさで、脚本書きから撮影、編集までを20人ほどの部員で手分けして担当しました。テーマ曲も部員の作曲・演奏です。イメージしていたものが映像として実現したときは大変うれしく、みんなで時間をかけたかいがあったと感じたそうです。

埼玉県立深谷第一高等学校放送部が出品した『さくら』は、2099年という未来の時代に、環境破壊により変わってしまった地球で暮らす二人の少女の出会いと別れを描きました。顧問の宮川辰也先生は、映画を作る中で生徒たちの物の見方が濃くなっていくと感じました。「作品は自分の分身のようなもの。作り上げていく中で、日頃見えない自分自身が見えてくるのです。」

*7 映画甲子園：正式名称は高校生映画コンクール。
主催：NPO法人　学校マルチメディアネットワークセンター
http://www.smn.or.jp/eigakoushien/

©埼玉県立深谷第一高等学校放送部
『さくら』のワンシーン

大好きなファッションで全国大会に挑戦！

しょうこ・あかね……高校２年生、神奈川県在住

しょうこ

以前から、服作りがとても好きでした。自分のためだけではなく、友だちのために服を作ってプレゼントすることもあります。

あかね

アクセサリーを作ったり集めたりすることが好きです。服作りにも挑戦してみたかったので、高校ではファッション部に入りました。

今回登場する二人は、同じ普通科高校のファッション部に所属し、大好きな服作りに熱中しています。そんな二人は、服のデザインや製作技術を競う、高校生のための全国大会「ファッション甲子園」に出場を果たしました。

ファッション甲子園とは

ファッション甲子園（正式名称：全国高等学校ファッションデザイン選手権）とは、全国の高等学校に在籍する生徒を対象としたファッションデザインのコンクールです。青森県の弘前商工会議所（Hirosaki Chamber of Commerce and Industry）他３団体が、青森でのファッション産業の発展、弘前市の町おこし等を目的に、2001年から毎年運営しています。

同じ学校に在籍している高校生２人か３人で１つのチームを組み、デザイン画を作成して予選に応募します。予選を通過したチームは、デザイン画に基づいて実際に服やアクセサリーを製作し、弘前市で開催される最終審査会（ファッションショー形式）に臨みます。チーム内のひとりがモデルとして作品を着用して舞台で披露します。ファッションデザイナーやジャーナリストなどが審査員となり、デザインや製作技術が優秀な作品に賞が授与されます。

© Fashion Koshien Executive Committee

最終審査会の開会式の様子。全国234校の応募の中から予選を通過した40校が集合。テーマは各参加者が自由に設定できます。「環境問題」「新型インフルエンザ」など現代社会を反映したデザインの服や、また、木屑などの新しい素材で挑戦している服もあります。

Q：ファッション甲子園をめざしたきっかけを教えてください。

しょうこ：ファッション部では、校内で年４回、そして地域で年１回行われるファッションショーに参加し、毎回決められたテーマに沿って服を作っています。例えば、リボンというテーマであれば、リボンの模様の生地を使ったり、アクセサリーや服にリボンを付けたりします。

２年生になって服作りに少し自信がついてきたので、ファッション甲子園に応募してみました。ファッション甲子園のことは何年か前にテレビで知って、おもしろそうだなと思っていました。将来はファッション関係の仕事をしたいので、こういう全国規模の大会で自分の実力を試してみたかったんです。

© Fashion Koshien Executive Committee

しょうこさんとあかねさんの作品。しょうこさんがモデルを務めた。タイトルは「she has…」。

あかね：しょうこが「一緒に応募しよう」と誘ってくれました。私も出場してみたかったので、声をかけてもらったときは嬉しかったですね。

しょうこ：デザイン画が予選を通過したと知った時は、涙が出て、手が震えるほど嬉しかったです。応募するだけで満足していたし、予選を通過できるなんて思っていなかったです。

Q：最終審査会に向けて、服の製作をどのように進めましたか。また、大変なことはありましたか。

しょうこ：余裕がないのは嫌なので、最終審査会の数日前までには完成させようと決めました。そのためにスケジュールを立てて、二人で分担して作っていきました。でも、服につける花作りに、予想以上に時間がかかってしまいました。スケジュールがずれて焦ったけれど、あかねが嫌な顔一つせずに、私の分まで縫ってくれました。

部活ではたいてい一人で服を作るんですが、今回はあかねと一緒に作ったので、とても心強かったし勇気がでました。

あかね：夜中に自宅でミシンを使っていると、家族から「ミシンの音が大きくて眠れない」と言われたのが大変でした。ミシンのスピードを上げると、音がうるさくなるんですよね。それで、ゆ

っくりと縫わなければいけませんでした。結局、最後の2日間は徹夜をして仕上げました。

Q：最終審査会に出場して一番印象的だったことは何ですか。

しょうこ： 全国から選ばれて集まっている参加者は、意識が高いし、デザインセンスも抜群。服に合わせたメイク、歩き方、ポーズのとり方とかも、とても上手。同じ高校生でもここまでできるんだ、と感動しましたね。

あかね： 今まで経験してきた部活でのファッションショーは、自分の好きな服を作って見てもらうだけでした。自分やモデルだけが満足すればいいと思っていたんです。でも、ファッション甲子園だと、披露するだけではなく、審査員から評価をされますよね。それによって賞が決まるわけですから。そんな経験は私にとっては初めてで、衝撃的でした。残念ながら入賞できませんでしたが、ファッション甲子園に出場できたことで、たくさんの人に「いいね」と思ってもらえるような服を作りたいと思うようになりました。

Q：将来は何になりたいですか。

しょうこ： 服の型紙を作る、パタンナーになりたいです。パタンナーは、デザイナーが描いたデザイン画をもとに、実際の服を作るための型紙を作ります。

最終審査会では、審査員から「デザイン画はとてもよかったのに、実際の服は、花の大きさや服の色などがデザイン画と違っていて残念だった」と指摘されてしまいました。このことから、デザイン画に忠実に型紙を作っていくことの大切さを学びました。

あかね： 私は、デザイナーになりたいです。いつか私がデザインした服がパリコレ注や有名な雑誌に出るといいな！

ファッション部に入るまでは一度も服を作ったことがなかったんです。人に聞いたり本を見たりしながら、作り方を覚えました。始めたばかりの頃、袖の作り方がわからなくて、トイレットペーパーの芯を型紙の代わりにしながら、袖の丸みを作ろうとしたこともあります（笑）。

試行錯誤しながら、デザインすること、製作することの楽しさを知ることができました。そしてこのファッション甲子園での経験によって更に服作りに対する自信がつきました。将来も、ずっと服作りに関わっていきたいと強く思っています。

© TJF

布を切り、絵の具で迷彩柄を描いていく。それを一つ一つ縫い合わせ、服に仕上げていく。

注：パリ・コレクション（Paris Fashion Week）のことで、年2回、フランスのパリで開かれる服飾ブランドの新作発表会。

ファッション甲子園は、主催者だけではなく、観客あるいはスタッフとして応援する地元の人たちにも支えられています。ファッション甲子園に関わる人たちの声を紹介します。

参加者たちのアイデアの豊富さと、夢に向かって進むパワーには驚かされます。とても同世代とは思えませんし、このような大会に出ることができるなんてすごいと思います。私も、ボランティアとしてお手伝いすることで、少しでもファッション甲子園に参加できて嬉しいです。

ボランティアスタッフ（高校3年生、女性）

毎年とても楽しみにしていて、必ず見に来ます。若い人たちの、デザインや色使いなどのアイデアには圧倒されますね。刺激を受けて私も若返りたいです。

地元観客（50代、女性）

優勝した作品「『ナン』ピース」
パズルのピースはひとつひとつ違う。それでも他のピースとつながっていく、という「つながり」や「結合」を表現。

© Fashion Koshien Executive Committee

わたしの好きなもの

好きなことば

しょうこ： 「仕事が楽しけりゃ人生の半分は楽しいんだぜ」「リアルクローズ」というドラマで使われていたことばです。私も仕事を楽しむ人生にしたいと強く思っています。

あかね： 素敵に無敵（＝素敵な人は、どんな困難にも立ち向かう力がある）。いつも自分がそうありたいと思うからです。

好きな色

しょうこ： 紫色。特にこれといった理由はないのですが、紫と黄色の組み合わせが好きなので。

あかね： 全部の色！　カラフルだと幸せな気分になるからです。